

## 事例 10 : 腰ベルト

### 対象者の状況

- ⇒ 83歳、男性 要介護度5、寝たきり度B2、認知症高齢者の日常生活自立度 a
- ⇒ 左片麻痺があり、移動は車椅子を使用している。右足でこぐようにして自力で駆動させている。
- ⇒ 座位の姿勢が悪く、右足で車椅子をこいでいるうちに臀部が前へずってくるため、その都度、姿勢を正す介助が必要であった。

### 身体拘束の状況

何度か車椅子からのずり落ちが見られたため、目が離せない状態となり、腰ベルトを使用することとなった。

### 対応方法の検討

姿勢を正しく保て、ずり落ちない車椅子や座位について、施設の理学療法士や在宅介護支援センターの福祉用具プランナーとも連携しながら検討を行った。

### 対 応

まず、本人の身体に合った車椅子を作成することとし、検討を行った。座面の高さが本人の身長に合っていなかったため座面を低めにし、ずり落ちを防止するために、フラットな座面ではなく、お尻が後ろに沈むようなものとした。

本人の身体に合った車椅子を利用してもらったが、右足で車椅子をこぐような動きをするため、どうしてもずり落ちたり、衣服によっては、滑りやすいものがあったりしたのでさらに工夫の必要があった。

車椅子クッションを使い、できるだけ臀部が後ろにくるようにし、滑り止めマットを敷いて、前に滑っていかないような工夫をした。

また、太股の下にバスタオルを丸めたものを置き、臀部より膝が少し高くなるように工夫し、臀部が前にすべらないようにした。

### 経 過

姿勢がかなり改善され、ずり落ちることもなくなったため腰ベルトを外した。

現在は、本人の好きな場所へ自力で車椅子で移動ができおり、笑顔も発語も見られるようになった。車椅子も使いやすく、本人も動きやすい様子である。

### 【着眼点（ポイント）】

福祉用具の専門家とも相談しながら、本人の体型に合った車椅子を使用できている。

その上で姿勢を正しく保持する方法が検討され、そのための体位や介護用品等の工夫がうまくされている。

